木野通信

発行所
京都精華短期大学
京都市左京区岩倉木野町137ノ1
電話 京都(075) 791-6131
編集人 野上芳彦

# 学問の再生を目指して

## 複合講座の試み

## 生きた人間の問いに答えられぬ学問

### 人間と対立する学問

一つのエピソードからはじめよう。昭和三〇年夏、森永ドライミルクに混入していたヒ素のため、乳児一三〇人が死亡し、一万二、一三二人が中毒する、という事件が起った。その二年後には、N阪大名誉教授によってヒ素による後遺症はないものと断定され、会社からの治療費も打ちきられた。しかし事件から十四年後の一昨年、同じ阪大のM教授らが当時の患者の追跡調査を行なった結果、多くのもの（約八割）がいまだに後遺症で苦しんでいる、ということが判明した。脳性マヒのため歩くことができないもの。知能程度が低いもの。頭や顔に吹出物が絶えなかったり、皮ふの斑点が消えなかったりするもの。断続的に腹痛、頭痛、発熱などのあるもの。骨に異常のあるものなど。

このことはその年の公衆衛生学会でも問題になり、被害者の父母たちは「N教授よ、ふたたび森永の手先となるのか」と横幕に書いてN教授をむかえ、学会内部でも論争になったが、これにたいしてN教授は、「私は医者として、なんらの責任も感じない。しかし一個の人間として反省している」とかたった（「毎日新聞」44・10・30）という。

医学の分野でみれば、このほかにも、札幌医大の心臓移植をめぐるさまざまな疑惑や、広島大のガン細胞移植の「人体実験」等、これに似た多くの例がある。これらを行った医者・学者たちは、「医学の進歩」のためにやったことであり、医者、あるいは学者としてなんらやましいところはない、というかもしれない。しかしなぜ、これらの例において学者であることと人間であることはこのように分裂しているのだろうか。学者であることと人間であることとは、本来無関係なことなのだろうか。しかし十四年後に患者の追跡調査を行った同じ大学のM教授はつぎのようにいっている。「企業の過失による私害や公害によって人一人の命がむしばまれている。それをみて直ちに原因を考え分析し、その結果を提示して告発することが、研究機関としての大学人の義務である」（「朝日新聞」44・10・21）

このように、具体的な、生きている個々の人間を出発点におくか抽象的な「社会の発展」「学問の進歩」を自らの研究のよりどころとするか、これは今日、すべての学問、研究にたずさわるものに問われていることである。しかし、まことに残念なことではあるが、いまの日本で（あるいは世界）で支配的なのは、その学者が人間であることとは無関係な、あるいは対立するような形で成立している学問だろう。もしそうであるならば、学問はいったいなんのためにあるのだろうか。人間のために役立っていないとしたら、それは何に役立っているのだろうか。

専門家、科学者のこうした傾向については、一九二〇年頃、スペインの思想家オルテガがすでにつぎのようにのべている。

——今日の科学者は近代の原始人、近代の野蛮人になってしまっており、良識ある人間になるために知っておかなければならないすべてのことのうち、ただ一つの特定科学を知っているだけで、しかもその科学についても、自分が実際に研究しているごく小さな部分にしか通していない人間である。我らは自分が特に打ちこんでいる狭い領域の外にあるいっさいのことを知らないことを美徳だと公言するに至り、全体的知識に対する好奇心をディレッタンティズムと呼んでいるのである。

——以前は単純に、知識のある者と無知なるもの、多少とも知識のある者と無知なる者に分けることができた。ところが専門家は、その二つの範疇のどちらにも属させることができない。専門家は知者ではない。というのは、自分の専門以外のことをまったく何も知らないからである。といって、無知な人間でもない。なぜなら、彼は「科学者」であり、彼が専門にしている宇宙の小部分についてはたいへんよく知っているからだ。われわれは彼を知者・無知者とでも呼ばねばならないだろう。……文明が彼を専門家に仕立てたとき、彼を自分の限界内に閉じ込もり、そこで満足しきる人間にしてしまったのだ。しかし彼の心のうちにあるこの自己満足と自分は有能だ、という感情は、彼をして専門外の分野をも支配したいという気持に導くだろう。そこから結果として起ることは、すぐれた資質をそなえた最高の人間——専門家——したがって大衆人とは正反対であるはずのものの場合でも、彼は生のほとんどすべての場面において、特別な資格を持たずに大衆人のように振舞うことになる。

すでに四〇年前にこのような形で見通された専門家の精神構造はさきに例をあげたように、今日ではますます顕著なものになっている。

専門化の過程は同時に学問の技術化・断片化の過程でもあった。技術そのものに思想はない。一つの目標なり、目的なりはすでに与えられていて、その枠のなかでいかに整合的かつ能率的な答を見出すかということなのである。目標は国家の繁栄でも産業の発展（工場の能率）でもよい。抽象的な〝学問の進歩〟でもよい。それらはすでに所与のものとして与えられている。たとえてみればギリシャの強盗、プロクルステスの話のようなものである。彼は人を鉄のベッドにしばりつけ、ベッドより長い者の足を斬り、短かいものは引延した。

学問が技術化断片化するにつれて、具体的な人間にとってベッドの寸法が合わなければ、ベッドの方をとりかえる、ということは忘れられてくる。

——無数の研究者が効果をあげるためなら、科学を小さな断片に分割し、研究者がその一つに閉じこもり、他をかえりみなくてもかまわないのである。方法の確固さと正確さが、このような知識の一時的・実際的な分割を可能にしているのである。研究者は、そうした方法の一つを機械を操作するように扱えばよいのであり、豊富な結果を手に入れるためには、それらの方法の意味や基礎について厳密な観念を持つ必要はないのだ。こういわけで大部分の科学者は、巣箱の蜂窩にいる蜂のように、あるいは小部屋に入った火夫のように、実験室の小部屋に閉じこもったまま、科学の全般的進歩を後押ししているのである」（オルテガ）

### アポロ計画とベトナム戦争は盾の両面である

このようにしておしすすめられた「科学の全般的進歩」は、たしかに月面への到達、アポロ計画を可能にした。しかし同時に、電子計算機によるギル・レイト（殺傷率）という非人間的方法をもうみだした。

このような形で学問が科学の発展、技術の進歩に関われず、与えられた目的の枠内で「客観的」に研究することをのみ自己の任務とすればよいのであるから、自らが割り出した数字に合わせてベトナムの野で、カンボジアで、ラオスで罪なき人が殺されようと、心のいたみを感じなくてすむ。ベッドの寸法はだれか他の人がきめたのだといいぬけることができる。今日よくいわれる〝学問の中立性〟ということばは、このような学者の主体性の欠落を合理化していることが多い。

アポロ計画とベトナム戦争は盾の両面である。なぜならアポロ計画は、地上のさまざまな非惨や不幸からひとびとの目をそらせるために天上の「新たなる宗教」（H・ルフェーブル）として、意識的に推進されていることだからである。

いままでのべたことに対して、学問の技術性、専門家の野蛮性というのは自然科学の分野のことなのであって、社会科学や人文科学は人間や社会を扱うものであってもっと総合的なものである。むしろ科学技術の発展に人間の精神をつりあわせるために、これらのものがある、という反論があるかも知れない。そこで、社会科学や人文科学では学問の現状はどのようになっているか、つぎに検討してみよう。

——学問や思想というものはすべて、一九世紀に二応完成したといってもよい。あらゆる学問の範疇や概念が定められ、観念論もマルクス主義もプラグマティズムも、すぐれた思想家があらわれて、その形をととのえたのが一九世紀である。またヘーゲルの哲学体系が示すように、それは巨大な体系化でもあった（笠原）

現代の学問もたしかに、ヘーゲルを研究し、マルクスを研究し、実存主義を研究し、プラグマティズムを研究する。しかしまた一〇世紀は「それらの学問や思想の概念が混乱し、体系が破壊されてゆく、崩壊過程でもあった」（笠原。）

学問・思想がその当初の破壊と創造のエネルギーを喪失したとき、二つの方向がうまれてきた。一つは、既成の体系の「解釈」に従事した。そしてそのとき、思想や理論の創造者形成者たちをつぎうどかした、人間とはなにか、社会とは何か、その時代に生きる人間の不幸とはなにか、人間や社会はいかにあるべきか、という本源的な問いは、学者の視野からぬけおちてしまった。そうなってしまえばこれらの体系はたんなる、ひからびた「活字化された過去」（深作）にすぎないものとなり、学問は訓詁学に下落する。

もう一つの方向は、前記のような虚偽な体系化を批判して、実証的な研究におもむく。目のまえに事実としてあらわれるもののみが信ずるにたるものであって、みえざるもの、背後にあるものなどはもともと学問の対象にはなりえない、というわけである。

しかし、「全体」に関わりない狭い領域での実証的研究は、やはり前述したような学問の技術化の過程であった。空洞化された全体を訓詁学的に扱う方法は、現実との接点をいちじるしく喪失しているが、実証主義的な方法も、人間や社会の表層の一部をほんのすこしかすめとっているだけである。わたしたちは今日、科学的なデーターにうらづけられた学問はほんとうに具体的な人間の要求に答えることができるのか、もう一度問うてみなければならない。

社会学の例をあげよう。自殺の研究がテーマであるとする。社会学者はどのような社会で、何パーセントの人が自殺するか、というようなことを、実証的に研究する。実証主義者コントの流れをくむフランスのデンルケームの「自殺論」などは、そういう研究であるが、人間は何パーセントという量として扱われており、個々の自殺の危機においこまれている具体的な人間、誰にもうちあけることもできず、ひとりはんもんとしている孤独な人間は登場してこない。それと無関係に所与の社会の傾向性、あるいは法則を実証的にみつけだそうとする。自殺の危機におちこんでいる人間に「生きるべきか死ぬべきか」という問題について、ひとことも答えることができない自殺の研究とはいったいなんだろうか（もののべながおきき）。人間にとってどのような意味をもっているのだろうか。もう一度考えてみる必要がある。このような研究は、生きる知恵「wisdom」ではなくて、たんなる「knowledge」（野上）にすぎない。

今日において、知識の習得ということは、文化の伝達にとってもちろん重要なことであるが、それが全体から切りはなされたとき、あるいは生きた人間という時点を欠落させるとき、そういう学問ははたして何のためにあるのか、ということを自然科学におけると同じように問いかえしてみる必要がある。現代の大部分の学問は、人間を扱い、社会を扱うといいながらひとりひとりの人間にとってほんとうに切実な問題に対して、答える能力をほとんど失っている。学者にとって人間や社会は自らの研究のたんなる対象にしかすぎない。

イラスト・坪内成晃（デザイン）

### ことば・ことば

人ノ死スル、其ノ死スルノ日ニ死スルニアラズ、実ニ此ノ理想消スル時ニ在リ。国ノ亡ル、国亡ルノ日ニ亡ルニアラズ、亦此ノ理想滅スル時ニ在リ。人ノ死生、国ノ興亡、唯此ノ理想生滅ニ係レリ。

柏木義円「天国及ビ地獄ノ弁」

## 現代学問の虚偽性

羽仁五郎氏が語るつぎのような例も、非常に単純なことのようにみえながら、現代の学問の虚偽性を鋭くついている。

——僕は参議院の法務委員を永年やったんだ。それで裁判所はひどいようだから視察にいったんだね。……僕は前にすわっていた。そうするとかわいそうな男が一人ひっぱりだされてね、そして裁判長がその気の毒な男に向って何というかといったら、〝検事の追起訴について被告人がもっている権利は本起訴の場合と同様だからね〟聞いていた。

（三面へ）

## 坂道

一九七〇年代はどのような時代か。八卦見のような占いをやってみるのも面白いかもしれない▼時代の風潮から察すると、人類は自らつくった環境にいたたまれずにそれから脱出しようとする方向に向うだろう。積極的なタイプの人間は、現状打破を目指して闘うだろうし、消極的なタイプの人間は逃避して夢を見るだろう▼今、アメリカの最大のベストセラーはシーガルの「ラブ・ストリー」で、千二百万部売れている。これを新しいロマンチシズムの台頭と見る人もいる。インドシナ戦争、黒人問題、学園紛争、失業、物価高など苛烈な現実に、こと十数年来直面させられてきたアメリカ人は、現実を忘れさせる甘美な夢を求めているのかもしれない▼自分の手におえぬ任務を背負わされたとき、人間の反応は二種類ある。ある人はそれを引き受け、ある人はそれを投げ出してしまう。困難な状況に立てば立つほど元気の出てくる人もいれば、順調な時にしか自らを発揮できない人もいる▼七〇年代は間違いなく複雑で、困難な状況であり、それを克服できる人はクールな心と大胆な行動力をもった人であるだろう。ますます増大する情報も正しく分析し、仕事の負担が大きすぎるからといっても決して投げやりにせず、いつも心の底に自信を秘めていて、しかも人に協力したり協力を求めたりすることのできる人である▼七〇年代の作業は、十八、九世紀的のロマンチストのように孤立して絶叫するタイプの人間の手には負えない。ルネサンス期の人間や幕末維新の志士のスケールの大きさは、彼らが為す仕事がことごとく社会的還元性を持ち、更に、彼らはその作業に命を賭けるほど百らの仕事に喜びと誇りを持っていたからであった▼いやいやながらの仕事は能率が上らない上に失敗も多い。仕事が自分の喜びであり、朝目覚めてから夜床に入るまで仕事のことを恋人を思うように思いつめなければ本当の働きはできない▼果して、七〇年代にわれわれは第二のルネサンスの時代を開きうるだろうか。

（小野修）

（一面より）

というんだ。何のことか全然わからない。……だからわかいそうな男はしようがないから〃へえっ〃ておどろいちゃって、そういうよりしようがないんだよ。全然わからないんだ。その哀れな男は、一〇年位前のことだがタマゴをどこかで一〇〇ほど盗んだらしいんだ。それで捕まって起訴されて、検事がいろいろ調べたら、その他にも五〇ばかり盗んでいたことがわかったんだ。それを追起訴されたらしいんだ。追加されたらしいんだよ。その追加された五〇個のタマゴについて被告人のもっている権利というのは、つまりその罪が、有罪か無罪か、無罪なら無罪だと、いわゆる認否権だね、認否権は初め一〇〇個盗んだときに、それを認めるか認めないかという権利と同じだからということなんだね。そういう風にいったらいいじゃないか。検事は百個のほかに、あとまだ五〇個盗んだというんだけれどこれについても盗んだか盗まないか、おまえは盗んでいないなら盗んでいないといっていいんだからね、そういえばいいじゃないか。そういえばかわいそうな男もよくわかるんだよ。そうすれば前の一〇〇個も盗んでいないし、今度の五〇個も盗んでいないとちゃんといえるんだ。〃へえっ〃と恐れる必要はないんだ。

羽仁氏は大学がこの例のようなふつうの人には理解することのできないような言葉や学問をうみだし、そのことに無感覚であるような裁判官や検事や弁護士をえんえんと製造しつづけていることを批判している。

学問はふつうの人々の日々の生活に無関係であるだけでなく、それを「高いところ」から見おろしそのことをもって学問の権威と錯覚することもできるのである。

だからわれわれは今ある大学を「学問の場」だとか、「理性の府」だとかいってアプリオリに肯定してしまわない方がよい。大学において具体的に行なわれている学問の内容と機能をこそ問題にすべきなのである。

学校教育法第五二条には、「大学は学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的、応用的能力を展開させることを目的とする」と規定されている。

また、日本の大学に、戦後、導入された一般教育という制度は、学問の前述のような状況を是正しようとする試みであった。その目的は、

①、過度の専門化の人間教育におよぼす弊害。知識、技術の伝達だけにおわって、その背後にある人間の精神との接触を失い、その目的である人間を見失なった教育の欠陥。

②、文化的遅滞現象、すなわち科学技術の急速な進歩と、世界を理解し、それを統御しようとする人間能力の間のアンバランス。明確な価値観と、適切な判断力と、勇気と持続力のある実行力をもつ人間の育成の必要。

③、高等教育の機会均等への努力の必要。（西村秀夫）

## 活字化された過去の社会と『専門バカ』

教育基本法の規定をみても、一般教育の位置づけをみても、戦後の大学教育は、学問の専門化、技術化への警戒心を充分にもっていたと思われる。だがこうした方針はその後の過程でうまく定着しただろうか。本学の「複合講座」の提唱者である文化人類学の深作教授は、現状をつぎのように分析している。

一、大学は各科の学問を総合的に教えているか。

形のうえではそうである。しかし、現実はちがう。一人の先生は、他の先生たちがどんな視野からどんな講義をしているか少しも知らない。同じ大学に二〇年勤務したところで、講義内容についていえば、芭蕉の句ではないが、「となりは何をする人ぞ」である。それぞれが相互連絡も相互協力もなく、密室的にやっているのだ。いわば巨大な〃蜂の巣〃的なもので、学生は、ある穴（教室・講義）にもぐりこみ、やがて出てきて別の穴に這入りこむ。この連続の毎日だ。外気は快いわけである。

二、学生は各種の教授内容を相互に連関させて把握しているか

残念ながら〃ノン〃に近い。制度がこのようなので、学生たちは頭の中に沢山の小ひき出しをつくり、これは政治学、これは社会学、これは心理学……というように知識を分類しておく。あるいは、自家用車で運転しながら聞く音楽のカセットのように、試験の時にその科目のノートと呼ぶカセットを入れて、勉強する。次の試験には、別のカセット。彼らは各個撃破の処理法に熟達している。もちろん、一つの科目と他の科目の間に、何の関連も考えていない。沢山の単位を処理することに追われているからだ。こうした学生の傾向をみて「今の学生はダメだね」という人もいるが、学生だけを責められない。大学の講義間に、何の連関もないからだ。

三、次に、教える側は、めまぐるしく社会変転する現代に対応しているか。

きわめて超越的で、むしろそれを誇りとする者が多い。一番欠けているのが現実へのフィールド・ワーク。机の上に本を積みあげ、肱掛椅子に坐り、煙草をくゆらせながら取りくむ社会とは、すでに過去化された社会であり、その上に活字化された一部の社会にすぎない。それで社会がわかったつもりだから、学生から〃専門バカ〃と、笑われるのだ。しかし傲岸な先生は「近頃の学生のいうことや考えることは、わかりませんな、ハッハッハッ…」と笑っている。

こうした学問・大学の現状は、もはや回復不可能なのであろうか。学問がひとびとが生きてゆく上にほんとうに役立ち、現実との接点を回復し、たんなる〃理性的〃人間ではなく、全体的人間を、その全面的開花を促進するのに役立つ道は、もうのこされていないのだろうか。そうであれば大学は、たんなる地位のためのもの出世の手段にしかすぎなくなってしまうかもしれない。

## 学問、思想の総合化と革新

最近明るみにでた刑務所、医学界、教育界にまで及んだ入学試験問題売買事件などは端的にこうした傾向を反映しているが、同時にまた、この傾向を是正しようとするさまざまな試行錯誤もある。

——現在、そして今後の課題は学問・思想の新しい総合化、全体化であろう。その萌芽はすでにあるが、形象はいまださだかではない。

そのことは人間の問題、人間とは何であるべきかという問題にもあらわれている。かつてホモ・サピエンスとか、ホモ、ファーベルとかホモ・ルーデンスなどといわれ、智恵や技術や遊戯などが人間の本質として考えられ、それぞれに真理であるといってよいが、人間とは一つの概念や思想で規定されるものでなく、もっと全体的に把握されなければならぬ存在である。その意味で、全体的人間ということが今日の課題であり、また、たんなる教養の集積という意味でなく、総合的人間というものが必要とされている。そこにも総合化、全体化の動きがある。

「総合」ということは、決していろいろのものを寄せ集めたものではない。それは本来弁証法の概念であることにおいて、運動の相のなかに、否定を媒介にして、新しく生成されるものであろう。それは生命のかよいあう有機的な結合である。しかしそれは個々の真理が失われた全体性であってはならない（笠原）

——ぼくは「現代の学問」を志向するから、学問も革新されなければならない、と考えるのだが、その方法に四通りあろう。

A既存のものに部分的修正を加える。（これはどうにも通用しなくなった時点で行われるので、常に後手後手となる）。Bかつて存在しなかった新学説の創造。（これは、誰にでもできるものではない）。C〃試行〃のくり返しの結果、うまれてでくる革新。（これには錯誤をも怖れずに試行追求をうながす切迫感、危機的状況が必要）。とすると、残る第四の方法のみが、普遍的になり得る。それは、D別種のものを学習し、時にそれを模倣し、革新をはかる方法。たとえば、自分の専門ジャンルでは扱いかねる問題があったとする。その専門ジャンルでの方法論では、扱いかねるからだ。（こうした問題をもたない学者は、自己を狭く限定して立ちこもったものか、動脈硬化をおこしたものだろう）。その時、他のジャンルで学び、知識と方法などを借用し、それを消化して自己の専門の中に組み入れて革新する。

以上四つあげたが互に連関もし得る。たとえば、マルクスはヘーゲル哲学からマルクス経済学を着想したし、レヴィ・ストロースの構造主義は、言語学の発想にヒントをえたものである。つまり、DはBと重なっている。

ぼくのいう「複合講座」とは、このDを考えたもので、他のジャンルとの接触により、限界をつき破ったり、あるいは自覚していなかった問題や弱点に気づき、改めて考え直したり補強したりする契機ともなろう。（深作）

## 現実との接点を回復するための試み

このような二つの基本的発想——総合的人間学の必要性と狭い専門の枠をつきやぶり現実との接点を回復する心要性——から、本学における複合講座という考え方がでてきた。

これを教学的な面からまとめると、つぎのようになる。

——現在の教育で、特にそのカリキュラムの上で配慮されねばならないのは、単なる学科目中心の考え方だけでなく、学生のニードを中心としての取り組みが一面では欠けてはならないということである。そして単なる知識偏重でなく、その知識をいかに活用しうる人を培うかという、全人的人格形成を意図した試みがなされなければならない。

知識と同時にそれを運用しうる良識ないしは知恵がすなわちKnowledgeよりWisdomに対する取り組みが配慮されるべきであろう。前に述べられた「頭の中にある小ひきだし」の言葉をうけて述べるならば、頭の小ひきだしに知識をつめ込む教育も一面では重要ならば、それをいかに活用しうるかを学ぶ教育はさらに重要である。このような配慮が現在の大学のカリキュラムでは基本的に欠けていることが指摘できる。このあやまりを是正するために、すでにいくつかの大学でも、いろいろな試みがなされている。本学でも、こうした問題について討議し、断片的には、二〜三の科目で、個別的にそれに近い試みがなされてきた。正式にカリキュラムとして組み込む諸条件について分析を重ねてみた。理論的そして理想的には、さまざまな組み合せが考えられるのだが、個人的、個別的な問題もあり、初めての試みとして多少試行錯誤的な面も含まれてくるので、とりあえず初年度は、文化人類学と心理学により「女性論」を、そして政治学、倫理学、社会学により「現代とは何か」を、複合講座として発足させることにし、その他可能なところで個別的にもそれに準じた取り組みが試みられることになっている。本年度の実績と反省の上に立って、来年度からは、さらに新しい方向づけが得られることになろうが、一般教育科目のみでなく、英語英文科、美術科、さらにはその相互間においても可能な試みが持たれることになろう。（野上）

女性論と現代とは何かという二つの複合講座の講義方法と内容をもう少し具体的にみてみよう。

【女性論】

この講座では、積極的に学生参加を求め、教権と学生側を分離してしまった講義形態にならないように、具体的なフィールド・ワーク等も重視し、又、視聴覚教育による取り組みも、積極的に導入してみたいと考えている。

予定としては文化人類学からは主として文化を、心理学的立場からは「男と女はどう違うのか」等、男女両性間にみられる性差を中心に展開したいと考えている。通年の講義となるので、全体を「女性に関する〇ケ章」という幾つかの章、ないし、テーマに分け、二つの学問分野からのアプローチを試みたいと思う。他に社会学やその他の学問分野からのアプローチが必要な場合には、その都度可能な範囲の協力を得、発足する以上は少しでも実りのあるものにしたい。（野上）

【現代とは何か】

現代とは何かという大きな問題を政治学、倫理学、社会学の角度から総合的に探求する。はじめ約四〇分間、一人の教師が問題提起をおこない、他の教師が見解を述べ、あと学生とともに討論をおこなう。問題意識をもち、討論に参加できることを履習の条件とする。内容はおよそつぎのとおり。

序論・歴史のなかの現代

1・世界と国家（現代世界の状況、資本主義、社会主義、第三世界、国家は必要か等）

2・社会と集団（家庭、労働と余暇、学校、都市、管理社会等）

3・人間の問題（人間とはなにか、幸福と生きがい、生死と宗教、疎外と孤独、自由等）

ここにみられるように、文化人類学と心理学による女性論では、フィールド・ワーク的な方法によって現実性を重視し、しかもその現実を断片的にとらえるものではなく、狭い専門の枠をぬけでて複眼的に把握する方向を志向している。

政治学、倫理学、社会学による現代とはなにか、という講座では、人間とはなにか、社会とはなにかという本源的な問いを基底にすえて、総合的人間学に接近してゆきたいと考えている。

この両講座において、もう一つ重要な点は、われわれが、教師—学生という一方交通をできるだけ廃したいと考えていることである。前述のようなテーマに関しては、学生の方が鋭い問題意識をもつということは、つねにありうることであるし、なによりもまず、学ぶもの—教えるものという相互性のなかからしか、新しいものはうまれてこないだろうと考えられるからである。

## 専門教育での問題点

付　一般教育の分野では、このような新しい試みをもって本年度から歩みだしたが、専門教育の場でも同じような問題が討議されはじめている。しかし専門教育の場では、はるかに複雑な問題をはらんでいるので、いまここに、二つの異なる意見を紹介して、今後の論議を期待したい。

【Ⅰ】

「私の主張したい理念は、ある特定領域のスペシャリストが同時にジェネラリストでもあるということで、欲を言えばルネサンス的人間像を私は理想として求めるのである。だから、英語英文科の学生は、まず英語のスペシャリストであることが第一。ついで、一般的教養にも通ずるという必要がある。その逆は知恵の浪費であるからいけないと思う。英語英文科で英語を学ばないでジェネラリストになることは、態のよい言いのがれなのである。従って、私としては、複合講座を英語科の専門科目に持ち込んで英語学習がおろそかになるなら反対である。

昔、私がはじめて英語を習ったときは、竹の地下茎でつくった鞭をもった教師に教室でたたかれたり、おどかされたりして英語を学んだ。このやり方には多くの欠点もあるが、授業には気迫と緊迫感があった。

複合講座などで、学生をまず甘やかし、機嫌をとってものを教えてゆくというやり方は教育ママ的で私は好きになれない。学生にしても、教師が学生のフィーリングに気をつかうようになったらおしまいだと思っているのではないだろうか。」（小野）

【Ⅱ】

「外国語をまなぶことには、外国語それ自体の修得の副産物として、母国語の特徴を、外国語との比較によって把握できるという側面がある。ひとつの言語だけを知っていたのでは、その言語の性格や語彙による考え方や表現の限界に気づくことはむずかしい。

英語にしろ仏語にしろ、中国語にしろ、言語に興味を持つ以上は、母国語である日本語についても、やはり興味を持たなければならない。どれをとってもおなじ、人間の言語による、意味伝達の手段なのだから、母国語に対する感性が高くなければ外国語を十分にわかるようになるとは思えない。

現在は一般教養に組みこまれている「文学」というコースをこういう方向にひろげてゆくか、それとも、日本語による作文や話しかたのコースをつくって、英語科のコースの作文や会話と複合してゆくことはできないだろうか。

必要な場合には一般教養の方々に特講をおねがいすることをもっと推進してゆきたい。」（鶴見）

【この記事は、本学の深作光貞（文化人類学）、笠原芳光（倫理学）、野上芳彦（心理学）、小野修（英米思想史）、鶴見貞子（英文学）、小林牧子（社会学）、坪内成晃（デザイン）らの討論をもとにして、小林がまとめたものです。】

作品・森本（絵画）



# 柳島先生の死をいたむ

## 雨中に教え子たちが焼香

京都精華短期大学創始者の一人で、英語英文科の柳島彦作主任教授は、さる四月四日午後六時十五分、脳卒中の為、自宅で死去された。七八才。

同教授は、明治二六年二月二十六日生れ。大正五年同志社大学経済学部卒業、入隊の後、同志社中高教諭、同大学講師を経て、昭和三十年法学部教授、同三十三年定年退職後も、同大学講師を三十八年まで続けられた。三十八年より梅花短大、同女子大教授を経て、昭和四十三年よりの本学創立に参画され、今日まで、英語英文科主任教授として英語教育に邁進されて来た。著書に、"Ryōkan the great fool"「大愚良寛」（京都精華短大出版部）や、いくつかの英詩集、他英訳書多数。

葬儀は、四月六日午前十時より自宅で行なわれ、関係者に混って多くの教え子達が雨をついて焼香し故人の冥福を祈った。

# 志願者、入学者増え　地方が進出、男子減る

英語英文科　二〇〇名
美術科　二〇一名

一九七一年度京都精華短期大学入学式は、四月六日午前十時より国立京都国際会館に於いて行われた。

開学以来四年目をむかえ、年を追って、本学のカラーや教学方針が多くの人々の間に理解され、定着しつつあるためか、今年も昨年の約一・五倍の入学志願者があり、その中から選ばれた新入学者は、英語英文科二〇〇名、美術科二〇一名（絵画コース、六八名、デザインコース・九七名、染織コース三六名）、計、四〇一名。

出身別の内訳で、今年度、顕著なことは、自宅外通学者（地方出身者）が自宅通学者（近畿圏出身者）より数の点で上まわったことである。ちなみに、昨年度の入学者三七四名中自宅通学者は一九六名（五二％）であったのに対して今年度入学者四〇一名中自宅通学者は一六一名（四〇％）となっていることが示す通り、通学範囲外の入学者が増加したことがわかる。

このことは、先に述べたように本学に対する認識が全国的に深まりつつあることと無関係ではないだろう。

一方、男女別の入学者の傾向をみてみると、男子学生数は、今年度全部で四八名と、全体の約一二％で、初年度から、年々、全体に占めるその比率が下って来ている。このことは、注目に値することで、今後、さまざまな視点からの検討を要するといえよう。

ともあれ、来年度には、開学五年目を迎える本学が、あらゆる面で今後、社会の大波をもろにかぶることになるわけで、全学的な討議を経つつ、新しい理念のもとに斬新な方針が待たれるところである。

# E・H（イングリッシュ・ハウス）が完成

## 今後は洋画も上映

英語教育の一環としての課外活動の推進と、一部実用英語の学習の為に建設が望まれていたイングリッシュ・ハウス（E・H）が、昨年九月に完成し、その落成式が同月二十二日同館に於いて行なわれた。

当日は、記念講演として、来日中のニュージーランド・ワイカト大学理事のゴードンバーカー氏に同じ小規模大学として実をあげている同大学のゆき方等を話していただいた。

講演は、英語で約二〇分間行われ、小さな大学から出発したワイカト大学の実例を示し、本学と精神に於いては共通した点が多いことを指摘された。

又、小教学生でも結束してやれば、必ず良い結果をおさめるとの話に、はるか大洋をへだてた国の単なる話として聞きすてることのできない感銘を参会者に与えた。

尚、今後は、学生の交換留学の実現に向けての努力が相互にすすめられることで一致した。

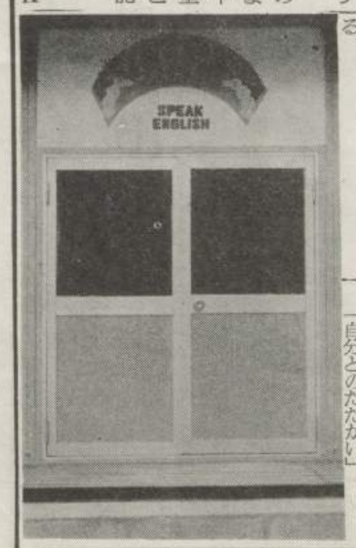
出席者は岡本学長をはじめ、本学教職員、学生合わせて約一〇〇名。講演の後、軽食によるレセプションをもち、完成を祝った。

このE・Hは、プレハブ作りの簡単なものだが、アメリカ風にまわりを幅の長いテラスで囲った平屋で、床面積約五〇平方米。入室者は、英語以外の言葉で話すことを禁じられ、必然的に英会話の能力がつくよう配慮されている。

昨年の大学祭「木野祭」では、E・S・Sの英語劇がこのE・Hで上演された。

日常的には、E・S・Sの研究会や、又、正課のオーラル・イングリッシュの授業その他、英語に関する諸々の催し等に使用されている。

又、今後の計画として、学生のヒヤリング力を高めるべく、毎週欧米の映画を上映する予定もある。




## アッセンブリーアワーの紹介

○四十五年十月一五日「手が観た世界」陶芸家・八木一夫氏講演
○〃十月二九日「学問と人生」物理学者・湯川秀樹氏講演
○〃十一月五日「二元的日本のイメージ」京大人文研助教授・多田道太郎氏講演
○〃十一月一九日「自分とのたたかい」本学教授・柳島彦作氏講演
○〃十二月十日「回想のジャコメッティ」法大教授・矢内原伊作氏講演
○四十六年四月十五日「現代の芸術」評論家・針生一郎氏講演
○〃五月六日「性と人間」大阪市大名誉教授・朝山新一氏講演
○〃五月二十日「韓国観たまま」本学教授・野上芳彦氏講演
○〃六月三日「現代詩の世界」詩人・佐々木幹郎氏講演
○〃六月十七日「ジャーナリズムと女性」毎日新聞京都支局長・岡満男氏講演
○〃七月一日「これからの市民運動」ベ平連事務局長・吉川勇一氏講演

# 「比叡山暮色」

## 伊谷家より本学に寄贈

昨、四五年三月に担管炎の為亡くなられた、故伊谷賢三美術科主任教授の御遺族より本学に遺作の油絵の寄贈があり、その除幕式並びに故伊谷教授の追悼集会が四五年十一月十二日、Ⅲ—21教室で行なわれた。

寄贈された絵は、伊谷教授晩年の作で、入院中に心を奪われたという比叡を題材にした「比叡山暮色」（F50号・油絵）。

式は、本学、とりわけ美術科の創始に際して献身的な尽力のあった伊谷教授に感謝すると共に、惜しみて余りある世紀の才能を失った悲しみをはばかることなく全ての関係者と共有し、その偉業を偲ぶ言葉に終始した。

岡本学長、福井美術科主任教授入江完君（絵画専攻科）等の追悼の言葉の後、文字七重さん（絵画専攻科）の手で遺作の除幕が行われた。最後に、遺族を代表して、夫人から、故教授が在任中、精華の人々にいろんな意味でお世話になったこと、並びに、今後共、多くの学生に故人の絵を永く観てもらうためにこの作品を精華短大に贈ることにした——とその動機を語られ、出席者の胸を打った。

尚、「比叡山暮色」は除幕の後本館会議室に飾られている。

作品・斉藤博（絵画）

# 画期的な学長選挙規定

## 岡本清一学長を再選

われわれの大学はこの四月に創立四年目を迎えた。そして三月三十一日で過去三年間の学長の任期が終った。

開学当初はすでに岡本清一氏が学長に予定されていたので、最初の学長選挙は信任投票的なものであったが、今回は正式に学長選挙規定を作り、それに基いて学長を選ばなければならない。そこで学長選挙規定作製委員会が教職員十二名によって構成され、規定案の作製に当った。

学長選挙は大学においてきわめて重要な問題で、少なからぬ数の大学において教職員間の政治的抗争の場となったり、学生参加をめぐって闘争が惹起されたりしている。そのおもな問題点は教員と職員の権利の差違、学生の権利を認めるか否かの二点にあるといえよう。

学長選挙権が教員のみにあり学長の被選挙権はそのなかでも教授のみにあるというのが、多くの大学の実態である。しかし「学長とはなにか」という問題を考えるとき、大学における教学と行政の責任者である学長が教員から選ばれなければならぬという明確な理由はない。また学生が無権利のまま放置されてよいはずがない。

そのような問題を勘案して委員会では規定案を作製した。その主要な条項はつぎのとおり、括弧内は解説である。

第一条　学長は選挙人の直接選挙によって選ばれる。（予め候補者を定め、そのなかから選挙するのではない）

第二条　被選挙人は専任教職員または専任教職員五名以上の推薦のあるものとする。（専任教職員はすべて学長に選ばれうる。学外者を学長に選ぶことも可能である。学内での立候補や推薦は自由である）

第三条　学長の任期はその就任の日から三年とする。

第六条　選挙人は専任教職員とする。（教職員はすべてひとしく選挙権を有する）

第八条　選挙は有権者の過半数の投票をもって成立する。

第九条　当選人は有効投票数の過半数をもって確定する。過半数に達しない場合、または上位二名が同得票数の場合はひきつづき再投票によって確定する。

第一三条　学生の当選人に対する不信任は開票後二ヵ月以内に学生数の過半数をもって成立する。（学生の参加については学生も教職員と一体化して選挙権をもつべきだという考えと、学生は大学当局に対する批判者であるべきだから不信任権【拒否権】をもつべきだという考えがある。ここでは後者を採った。この規定は案の段階で学生自治委員からも見解を聴取した）

第一四条　有権者が学長を不信任するときは過半数を必要とする。（任期の途中でも学長をリコールすることができる）

このような規定案が二月二十二日の教職員合同会議ではかられ、「学長とはなにか」をもっと討論するべきだ、職員から学長が選ばれた場合、経営主義的になるのではないか、教員は教学的で職員は経営的とは限らない、などの討論ののち規定は成立した。ただちに選挙管理委員会が発足し、三月十七、十八両日、学長選挙が実施され、その結果、岡本清一氏が再選された。

今回の学長選挙の内訳は有権者総数五九名、有効投票数四一名、当選岡本清一氏三四票、次点野上芳彦氏五票であった。

この選挙規定は他大学に類をみない画期的なものといえるが規定は進んでいても現実は遅れているのではないかという反省とそれを実行に移すことなくして、今後のわれわれの大学の存在意義はありえないだろう。（笠原芳光）

# 知恵おくれの子らの作品集を自費出版

京都精華短大　V・Y・S

華やかな現代「表」社会にぴったりと背を合わせて、恵まれず、旦つ、知られていない「裏」の社会がある――。

この程、京都精華短大VYS（Voluntary Youth Social Workers Movement）の手で刊行され反響を呼んでいる知恵おくれの子らの作品集「大きくなったら」は、旦つ何げなくそれらのことを見過していた一学生がふとしたきっかけから、始めたボランタリ運動の一つの貴重な成果として、輝く光を放っている。

作品集は、以下に紹介する堀畑英子さんをはじめ学生ばかりのグループ十数人が集り、この問題に詳しい野上芳彦教授（心理学）のアドバイスを受けつつ、独自で企画、編集をしたもので、その出版費用は全て賛同を得た人々からの寄附やカンパ及び借入金である。

現在二千部印刷し、なお毎日、四、五〇通の便りと共に購入申し込みが届いているが、増刷の為の費用稔出に苦労しているという。

「大きくなったら」、京都精華短期大学VYS編・発行。（京都市左京区岩倉木野町一三七。）A五版、一〇二頁。定価二五〇円、送料五五円。

## 開かれるべき現実

堀畑英子

京都精華短大V・Y・S・で「ちえおくれの子らの作品集」を作ることになったそのきっかけを今から考えてみると、吉田先生の涙からだったかもしれない。昭和45年11月22日、府立婦人センターで行なわれた「公開映画と講演の集い」のパンフレットに書いてある、「かあさんのうた」を読まれて、私にお話しして下さった時の、先生の顔と言葉を忘れることができなかった。「これを読むと涙がでてきよる。こんなさびしい思いをしてるなんて、いとしゅうて……。」と先生からいわれた時、私自身の中にこみあげってくる何かがあったようだ。「かあさんのうた」を次に書いてみます。

せんせい

「かあさんのうた」

うたわんといて
このうたきくと
おうちへかえりとうなる
おばあちゃんに　あいたい
すみちゃんに　あいたい
かなしいうたや

最初何気なく読んでいた詩だが先生のその言葉を聞いて読み返してみると、その中に秘められたせつない思いが伝わってくるようになった。でも正直いって、先生の涙を浮かべられた目をみて、自分自身びっくりしたというか、意外な、そして、貴重な発見をしたと思った。人間の片すみにある心をチラとみた思いで、とても感動したのを覚えている。

この作品集を作り出してから、常に私自身にとっての精薄問題は何なのかと考えてきた。考えれば考えるほど、この問題の複雑さ、困難さ、また自分自身のいい加減な態度に、嫌気がさしてよく頭がおかしくなったものだ。施設訪問に行っても、なんとなく暗い気持になり、子ども達と打ちとけることができず、ただうつろな目で彼らを見つめるだけだった。話をしても通じないで、自分自身イライラしたり、彼らの汚れた手で顔を触れられる時、思わず身震いして、自分自身の心の狭さ、を感じて多分に自信をなくすばかりだった。

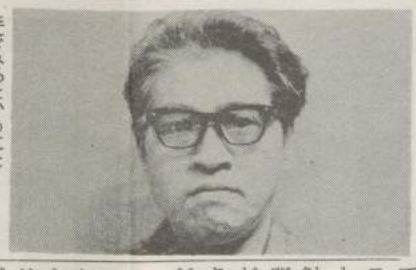
「毎日施設にばかり閉じこめられて可哀相だなあ、やることといったら、ただ食べて、寝て、遊んでトイレへ行ったり、室を片づけたりするだけなんて、さぞ退屈な日日を送っているんだなあ。」と自分勝手な想像をしたものだった。哀れを持つことの中に全く愛が含まれないとは思わないが、それは本当の愛じゃなくて、私自身の身勝手な、感傷に侵る行為だったといえるだろう。「施設へ訪問に来て、おまえは一体何をやっているんだ。自己満足しているんだ、この為善者。」と思わずにはいられない私の態度だった。丸坊主の男の子と手をつないで、園内を散歩していても、どこからか隙間風が吹いてきて、落ちつくことができず虚無に似た感を持ったのは、一体何だったのだろうか。彼らを理解しようとすればするほど、何が理解することなのかわからなくなり、現状を知れば知るほど、その底の深さに足を捕われ、沈みそうな自分を感じた。だが現実の一体どれだけを、私が知っているというのだろう。たった一度や二度の経験で、精薄問題に対する、壁につき当っていて、これからどうなるのだろうか。

最近は、考えるよりも、自然にまかせたいと思うようになった。複雑に考え込んでみたところで、自分に偽りがあれば、どんな行動もいつか息が切れるだろう。途中で息が切れてやめる位なら最初からやらない方がましだ。施設で働きたいと思うのなら、働けばよいだが私は働きたくない。自分の自然な気持に、忠実でありたい、私はボランティアでいたいというのが本当の気持なのだ。

「ちえおくれの子らの作品集」ができ上って、どれだけの人が読んで、考えてくれるだろうか、と期待に似た不安がある。つらい現実だが、彼らの現実は切り開かれねばならぬ。人ごとではなくて、私達自身の現実なのだから。全ての人がボランティアとなり、ボランティアという言葉がなくなった時、本当の幸せがくるのではなかろうか、自分の幸せを考える時、人はなんと不幸なのだろうか。自分自身に捕われることなかれ、これをモットーに精一杯生きてゆきたい。（ほりはた　えいこ、一九七一年三月英語英文科卒業、現在大日日本電線KK勤務）

# 講演　手が見た世界

陶芸家　八木一夫



### 手でみるということ

焼物屋の話ですから理路整然としたお話ができるとは思いませんが、そのなかから私の生活を感じとってもらえば喜びです。

私も齢をとりましたし、病気であるのに酒を飲みたくなったりして、一つの危機的な状態なので、若い人たちのなかにある不安というものが、いまだに私のなかに残っているような気がする。だからどんな話をしても、なんらかの意味であなたがたとコミュニケーションができるように思います。

「手がみた世界」という題をつけました。本来なら目がみた世界というべきところですが、私はいつも手と物とが触れあった仕事をしていますから、物事を考えるのに粘土をさわる触覚で考えているあるいは手で世界をみているのではないかと思います。美術品を眺めるときでも、私は視覚的にみるだけではなく、その作品に作者の手の痕跡があるのを感じる。ここはゆるやかに糸をひくように書いてあるとか、ここのところはヒステリックに逆上してやったのだなとか、作品のなかの一つ一つの筆触の跡をなぞっていくと、作者の関係のなかにまで入っていくことができるように思う。そこで作品を支えている精神にも触れることができるのではないでしょうか。

### 二代目への反撥

私が陶芸家になった理由ですがいまの学生が新しい芸術にとびこむというような深刻な状態ではありませんでした。私は生まれた時ずっと土のなかで育ってきたようなもので、つまり焼物屋の息子だったのです。焼物をするということが自然というか、消極的な気持で、この世界に入っていった。だから自分の仕事に心を躍動させるような切実さをおぼえませんでした。小学校の頃に初めて粘土細工をして、粘土をこま切れにちぎって遊ぶという楽しみがふつうの子供にはあります。それは粘土という素材とそれを手に持った人間というものが、なんの夾雑物もなしに出会うという体験です。ところが私は陶器師の子供として生まれてきたものですから、教室のなかでいままで騒いでいた子供たちが粘土を持たされた瞬間、それに熱中していく姿を冷然とした眼でみていた。

だから私は本来、焼物師としての資格に欠けているわけです。昔から陶器師の息子で大家になった人はいない。光悦、乾山、本兵衛みんな二代目ではありません。私のように初めから焼物の世界にいると、そのなかでの生活とか形式とかいうことに反感をもつ。それらを破壊して、新しい自分を見つけようとか、新しい可能性を探ろうとか、無茶苦茶なことをやりたくなって、不良少年のような仕事を始めたのです。

はじめは作っているものを殴るとか、ぶっつけるとか、ちゃんと、したものをぐにやりと曲げたりして、なにか新しいものができた。昔の人ならできあがったものを見て、未熟な点があれば「未熟です」といって頭を下げたものだが、私の若い頃は、未熟じゃないんだ、これは意欲です、味ですとか、なんとかんとか理屈をつけ、論理をふり廻してきたように思う。それは自分のなかにある一種のやましさをのりこえる気持のあらわれだった。そんな理屈を言いながら成長してきたように思います。

ともかく絵なら絵、彫刻なら彫覽会などに出品されている大きな壷などは、人の暮らしのためでもなく、自分のための仕事とも思えない。とすると人も自分もばかにしている、むなしいという感じがします。そんな壷はデパートなどで売っているのですが、それを買う人が生活のうるおい、豊かさを求めているかというとそうではない。取引先の会社が新しいビルを建てたから、なにか贈物をしなければならぬ。一万円ぐらいの物はないかというので、その壷を見つけて買ってきて相手にわたす。それで贈る側の心は晴れるわけですが、贈られる方はこれは必要だろうか、不必要だろうかということで、けっきょく倉庫のなかに仕舞いこまれるということになる。

むなしいことですね。あまりに自分の暮しや人の暮しをばかにしているのではないかと思ったので自分のなかに他人があるという考えかたをしなければいけないと思うようになりました。ところが私には他人の幸福は自分の幸福であるという考えかたができないのではたして陶芸家としての資格があるのだろうかと思うようになった。そこで自分のための作品か、人のための作品かという岐路に立たされてきたように思います。

たとえばコーヒー茶碗を作るとします。コーヒー茶碗というものはなかが凹んでいるとか、コーヒーを入れるものだとか、あるいは飲みやすい器であればいいとか、そういうことだけでコーヒー茶碗ができるわけじゃない。容積がいくらとか、コーヒーという液体を生かした材料でなければならぬとか、あまり重いものは困るとか、いろんな規格があるわけです。一方でそういう制約があるけれど、また一方では作家の立場からすれば、自由奔放に飛躍したい、夢をいうものはたいせつなものだと思います。どうも手のほうが先に動いて、作者の精神はどこにあるのかということになる。つまり技術が先行して、技術を使うはずの人間がどこかにとんでしまっている。作者は動かず、技術だけが動いている状態になる。へたをすると技術は、当の本人の精神を裏切って動いていることがあります。別に観念芸術論を唱えるわけではありませんが、やはり精神が大事だといいたい。

私が仕事を始めた頃、亡くなられた河井寛次郎さんのところに行ったことがあります。河井さんは民芸の権威者ですが、「焼物をやってるそうだが、君のは弱いんじゃないか。もっと勇敢にやらなくちゃいかんじゃないか」といわれた。それで勇敢ということはよくわかるけれど、私は基本的な技術をマスターしたい、それができてから胸に秘めているものがあるから、それをマスターした技術でやりたいと言ったのです。すると河井さんは「それは反対や。技術というものは精神を追っかけていくものだ。だから精神が大事だ。まずやりたいと思うことをやれ。そうしたら技術が伴わないから技術の会得も早い。そういう技術というものは精神にすぐ追いつく」といわれました。

若い頃でしたからそういう言葉に反撥しましたが、この齢になってみると、私も家にくる若い者に「精神が大事だ」といっている。どうも技術が先行すると堕落しますね。われわれ作家でも、技術が走りだすと、ちょうど売れる頃ですからだめになります。売れずに生活に困っている時期というのが一番いいわけです。それは精神状態がさかんに燃焼している時だと思う。

### 素人の精神

この前、画家で陶芸もやっているホアン・ミロが京都にきた時、案内係をしました。桂離宮や信楽などについていったのですが、本人に興味のないものをむりやり押しつけるよりも、ミロというヨーロッパの一流の達人が日本で立派とされているものとどう対決するだろうか、それを見たいと思ったのです。

奈良の大仏を見にいった時、署名帳に名前を書いてほしいといわれて、ミロが署名をしているのを見ると、墨で書いたものだから、字に太いところと細いところができる。それをミロは筆でいっしょうけんめいなぞっているんです。ミロの作品には日本の書道のようなものがありますが、力を入れるとか、飄々と書くとか、その時の精神の流れに応じて、一気呵成に書くのだと思っていた。ところがミロは書いたあとから直して、線を彼独特のふくよかな丸さに仕上げていくのです。われわれは小学校で習字の時間に一度書いた字をなぞってはいけないと注意されたけれど、ミロの字を見て、われわれの子供の時とおなじものを感じた。世界的な大家というより、そこらにいるふつうの素人とおなじ精神というものを感じて、私ははなはだ愉快でした。

それは他人を意識しない、自分がいいと思ったことを先行させる気取らない態度です。私は京都芸大の講師もしていますが、学校へ行くのは自分をエキサイトさせるためです。素人である学生が私よりいいものを作ることがあって、それが私をエキサイトさせる。ところがこの頃はわれわれよりよい仕事をする学生が少くなった。仕事をしていても、煙草をすったり人生は重たいとか、年中そんなことをいっている。

青春の孤独という意味ではよくわかるが、私のように手によって考え、手によって育ってきた人間は、手が参加しないと充実感がない。仕事をするからには手が感じ手がものを見るという世界をつくってほしいと思います。

（これは一九七〇年一〇月一五日にアッセンブリー・アワーでしていただいた講演の要旨です。文責は編集部にあります。）

討論を重ねるV・Y・Sのメンバー

## 編集後記

『木野通信』第三号をようやくにしてここにおくる。早くから原稿を預りながらそれらの多くは、既にその時期を失したことをすなおに認めざるを得ない。

一、二面の長文を手際よくまとめていただいた小林牧子氏は一児の母となられた。又、雑多な記事の整理、編集は、そのほとんどが坪内成晃氏の手によるものである。詫不徳、乞許。（藤井）